

京都大学	博士（教育学）	氏名	呉 桐
論文題目	「モダンガール」の歴史社会学 —国際都市上海の女性誌『玲瓏』を中心に—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、上海に生まれた女性雑誌『玲瓏』を資料に、近代中国における「モダンガール」という表象の分析を行い、近代中国における「女性性」の構築と変容のプロセスを詳細に検討したものである。論文は、序章、第1章～第5章、終章で構成されている。各章の要約は以下のとおりである。</p> <p>「序章 国際都市上海の「モダンガール」」では、先行研究の検討を通して、本論文の視角・分析対象・分析方法が明確に定められる。「モダンガール」にかんする、特に近年の先行研究では、「モダンガール」を世界同時的な社会現象として分析する国際共同研究が多く行われ、そこでは、「グローバリゼーション」「植民地的近代」という視点が採用されてきた。しかし、前者については、各地域の同時性が強調され、文化の不均衡な展開が看過されてきたという問題がある。また、後者については、「植民者/被植民者」という対立項のもとに、上海のような多数の列強勢力が混在する状況の複雑さが看過されてきたという問題がある。そうした先行研究の欠落をふまえ、本論文は、「半植民地主義」という視点を採用し、列強勢力の混在ゆえに被支配層の女性にもたらされた能動性に着目する。特に、「中国—日本—西洋」の三項関係のもと、「モダンガール」にもたらされたトランスナショナルな特徴に着目する。分析対象は、モダン文化と親和性の高い女性誌『玲瓏』（1931-37、三和出版社）であり、分析方法は、構築主義的なアプローチを採用する。</p> <p>「第1章 女性中心の言説空間の誕生：『玲瓏』の創刊」では、「モダンガール」表象の形成と普及に大きな影響力をもった女性誌『玲瓏』について、女子教育の成長にともなう読者層の拡大、雑誌の創刊経緯、「読み」の規定に着目し検討する。それらの検討により、女性中心の言説空間がいかにか成り立ったかについて明らかになる。1920年代末まで、男性知識人が女性問題を女性誌において論じることが多かったが、女子教育の発展とともに、女性読者層にむけた女性誌が登場する。1931年に創刊された『玲瓏』は、そのような女性誌の代表であり、男性読者の排除、購読行為のジェンダー化、フェミニズム的な読解力の育成などにより、女性中心の言説空間が成立する。</p> <p>「第2章 「モダンガール」を語る：外見を介した女性性の回復」では、五四新文化運動後の女性性の回復という社会状況について詳述したのち、「モダンガール」にかんする語りとそれを貫く論理構造が分析される。まず、「モダンガール」が「旧女</p>			

性」および「新女性」との対比のもとに論じられ輪郭を明確にしていったことが示される。そして、「外見/内面」という対立項にもとづいた「モダンガール」論の仕組みについての分析からは、「モダンガール」の性的逸脱についての言説が、既存の婚姻制度を維持する機能よりも、男女の交際における女性の地位確保をめざす機能を有したことがわかる。当時の女性性の回復の文脈において、母性主義（性的役割）とは断絶した女性性の形成、即ち、性的魅力の承認という別の女性性の形成がなされたことが明らかになる。

「第3章 「モダンガール」を演じる：美しさ規範の形成」では、『玲瓏』の表紙を資料に、「モダンガール」の身体表現が分析され、そこに隠されたジェンダー規範が明らかになる。分析によると、『玲瓏』には、「母」にかんする二つのイメージ（読者の将来像としての「母」、読者の保護者としての「母」）が両方とも不在であり、かわりに、外見を磨き自分をいつくしむ自己愛的な規範がみてとれる。第2章で分析した「モダンガール」にかんする語りと同様に、「モダンガール」にかんするビジュアル・イメージにおいても、性的役割と性的魅力の断絶がみられる。

「第4章 西洋への視線：「女性の独立国」としてのアメリカ」では、「モダンガール」の理想的なあり方を象徴する「ハリウッド女優」の表象についての分析が行われる。「自由な性的主体」としての「ハリウッド女優」の表象は、アメリカを「女の独立国」というイメージ上の文化統合体としてとらえることに寄与した。それは、中国女性が「西洋」を戦略的に用いる抵抗の形態であることが明らかになる。『玲瓏』の女性読者層は、「ハリウッド女優」の表象に、女性の主体性や能動性のあり方の手がかりを探し、女性同士のトランスナショナルな連帯を模索していた。

「第5章 日本への視線：「賢妻良母の国」を超えて」では、『玲瓏』における「日本女性」の表象についての分析がある。特に、日中が本格的な衝突に向かう中での「日本」表象に着目する。まず、「日本」への両義的な関心について詳述したのち、そこから、「日本女性」を男性に従属的な「賢妻良母」としてステレオタイプ的に表象することにより、「反日本」かつ「反体制」という二重の抵抗が可能になったことが示される。一方で、この時期台頭する「女性スパイ」という新たな「モダンガール」像がもつ境界侵犯的な特徴と可能性について分析が加えられる。

「終章 「過渡の女性」としての上海モダンガール」では、以上の分析から、近代中国に誕生した女性中心の言説空間『玲瓏』の「モダンガール」表象が、どのような役割を担ってきたのか考察が深められる。『玲瓏』における「モダンガール」表象は、「西洋」や「日本」を戦略的に用いつつ、母性主義イデオロギーへの対抗として、性的役割と断絶した女性らしさの構築に寄与した。このような「モダンガール」は、性的役割や国家の枠組みの流動化に作用するという点で、上海の異種混淆性を象徴する「過渡の女性」（バーロウ）としての特徴をもっていたことが明らかになる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文では、上海の女性誌『玲瓏』における「モダンガール」イメージの形成と変容について、半植民地主義の視点から綿密に考察が行われ、そこから、近代中国における女性自身による新しい女性性の形成のあり方について明らかにされた。以下、本論文の意義について述べる。

第一に、近代中国の女性イメージの形成過程について、1930年代の中国に誕生・発展した女性誌『玲瓏』を分析対象に的確に定め、綿密な分析を行った点が評価される。『玲瓏』の「女性メディア」としての特徴の形成のプロセス、女性中心の言説空間の成立に至る経緯を丁寧にとり起こし、そして、「モダンガール」について、論説とビジュアル・イメージの双方から立体的分析を行った。そのことにより、近代中国の女性表象や女性性の構築にかんして、女性自身による形成の様相と重層的なメカニズムを抽出したという点で、本論文の独自性・意義が高く評価される。

第二に、「モダンガール」表象についての従来の研究の視点（「グローバリゼーション」「植民地的近代」）と異なる、「半植民地主義」という視点から、上海の「モダンガール」像をとらえた点が評価される。「半植民地主義」という視点の採用により、列強勢力が混在する中で被支配層の女性が行使することとなった能動性に焦点があてられた。従来の「モダンガール」にかんする先行研究と異なり、「モダンガール」像構築における女性の主体性に明確に焦点をあてた分析が可能となり、大きな意義がある。

第三に、「モダンガール」表象についての詳細な分析により、性的役割と性的魅力の断絶が明らかになり、体制側のジェンダー規範を相対化しうるような新たな女性らしさの構築を抽出した点が評価される。特に、当時のメインストリームである母性主義へのオルタナティブとして、新しい近代的な女性らしさが構築されていた過程が丁寧に明らかにされた。

第四に、「モダンガール」の形成過程について、「中国—日本—西洋」という三項関係から分析を行った点が評価される。上海の「モダンガール」像の独自性は、「アメリカのハリウッド女優」のイメージ、「日本の賢妻良母」のイメージとの関係性のもとに形成された。本論文では、高い語学力と豊富な外国文献資料収集・分析により、女性性や女性表象の形成におけるトランスナショナルな側面に焦点をあてることに成功している。

本論文には、以上のような大きな意義がある。本論文の意義をふまえて、試問では、主に、以下のような議論・質疑応答が行われ、課題が示された。

第一に、本論文で重要な概念である「半植民地主義」という視点について、「植民地主義」ではなく、あえてこの概念を用いる理論的有効性について、本論文の内容をふまえて議論が行われた。本論文で指摘される被植民者による能動性・主体性は、

実際のところ、あらゆる植民地についてあてはまりうるものであることから、「半植民地主義」という概念を使うのであれば、「植民地主義」ではなくこの概念を使う意義を、より明確化すべきであるという課題が示された。これについては、本論文の鍵となる概念であることから、分析で得られた知見をふまえて、今後、さらなる考察を深めていくことが確認された。

第二に、『玲瓏』について、読者層や社会背景についての議論が行われた。女性の識字率の上昇や女子教育の拡大について、特に、『玲瓏』の読者層である女子について、どういった階層であるのか、学校文化との連続性があるのかについて、議論が深められた。また、『玲瓏』の提示した女性の自立の可能性——「経済的自立」とは異なる「文化的自立」の可能性——の意義について評価しつつ、そうした考えがどういった文化的土壌をもつ層に支えられていたのかについて質疑応答が行われた。さらに、『玲瓏』の理想とする「モダンガール」の交際・社交の空間の具体的有り様について質疑応答が行われ、外国人と交流する社交場のような空間というよりも、より日常的な交際の場が想定されていたことが示された。

第三に、『玲瓏』の提示する女性性と対抗的な女性性についての議論が行われた。まず、「賢妻良母」と「良妻賢母」の概念の違いについて、本論文の分析をもとに確認した上で議論が深められ、また、「モダンガール」と「賢妻良母」（「良妻賢母」）の連続／断絶について、日本との比較の観点から考察を深めることの可能性が示された。また、新生活運動が提示する女性性と『玲瓏』の示した女性性の関係について、本論文で言及されているが、さらに深めて考察する意義について述べられた。さらに、体制側の主張する母性主義イデオロギーについて、『玲瓏』の読者の生活にどのように反映していたかをより明らかにすることが、本論文の考察の意義を深め今後の研究を発展させる可能性として指摘された。

試問では、このように、質疑応答や議論が行われ、本論文の考察の意義を認めた上で、いくつかの課題や可能性が示された。しかし、これらの課題は、本論文で得られた知見の意義を認めた上で、さらに新たな研究を発展させていく材料として示された発展的課題であり、博士学位論文としての本研究の価値をいささかも減ずるものではない。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降